2023/05/10
令和4年度研究活性化推進経費 若手教員等研究助成経費（一般研究助成）
研究課題「児童の自己評価能力を育てる教育評価のあり方に関する実践的研究」

児童の自己評価能力を育てる「振り返り」指導

大阪教育大学 総合教育系　森本和寿

1. はじめに

- 2017年度以降の学習指導要領改訂では「主体的・対話的で深い学び」をキーワードとして、子ども＝学習者が主語になる学習のあり方が模索され、資質・能力の見直しが行われた。自己調整や「メタ認知」を働かせて主体的に学習に取り組む態度を育てるためには、子ども自身が自らの学習を適切に自己評価することが不可欠である。このような自己評価が具体化されたものとして、近年は授業や単元の末尾に「振り返り」を書かせることが実践されている。この「振り返り」では、自分自身の学びを省みて、それを自分の言葉で文章に綴ることが行われている。
- 一方、このような「振り返り」が自己評価として十分に機能しておらず、「単なるルーティン（決まり切った活動）として、やっつけ仕事のように受け止め」られているとの指摘もある（安彦, 2021, p. 174）。このような現状に鑑み、本研究では、**「振り返り」を自己評価として適切に機能させるためにはどうすればよいのか**をリサーチクエスチョンとして、この問題を理論、実践の両面から検討する。特に実践においては、大阪教育大学附属池田小学校との共同研究を手がかりとして考察している。

★学校との共同研究体制

附属池田小学校との共同研究

- 著者は2021年度から継続して附属池田小に入っており、参与観察者として継続的に授業観察を行っている。
- 著者は附属池田小教員と協働して授業づくりや単元開発を行ってもいるため、本研究はアクションリサーチとしての側面も有している。

研究方法

- 本稿では5年生の一クラスにおける理科の授業での「振り返り」を検討対象とする。
- 本研究は、児童の「振り返り」と授業観察記録に基づいている。分析・考察の形式は、仮説－検証的な授業研究ではなく、参与観察者が子どもの発言や記述等、授業内で生じた現象を記述し、その現象が置かれた文脈や意味を読み解く形で、それらがもつ意義や課題を質的に描き出すものである。

2.「自己評価」の理論的検討：政策・研究の動向

● 教育政策における評価方法としての「自己評価」への注目

- 2000年の教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の方法について」
- 2002年の「総合的な学習の時間」が正式導入、「ポートフォリオ評価法」の活用推進

● 教育研究における「自己評価」の検討

- 心理学：「評価」の方法と個人レベルの心理的メカニズムの解明。
- 現象学：ホリスティックに自己を看取する試み。パイナー（Pinar, W. F.）やグルメ（Grumet, M.）らによる「自伝（autobiography）」を中心とした解釈学的方法。
- 教育学：教育活動全体の中での自己評価の位置づけ、自己評価の教育的役割の検討。

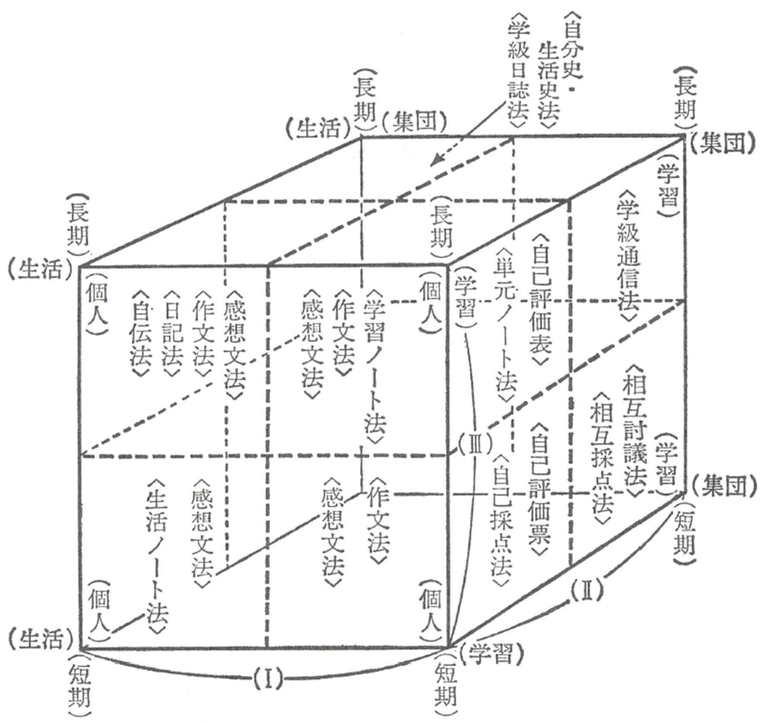
3.「振り返り」とは？

「自己評価」の方法：

● 三次元での整理（右図：安彦, 1987, p. 117）
✓ 学習面－生活面（行動面）
✓ 集団的（外的）－個人的（内的）
✓ 長期的－短期的

● 「振り返り」（reflective writing）は、学習的・個人的・短期的または長期的な「感想文法」を用いた自己評価である。

● 「振り返り」の課題
✓ 「なぐり書きする自己（scribbling selves）」（Pinar & Grumet, 2015）
⇒飼いならされた「浅い省察」に終始し、深い洞察なしに皮相な自己呈示として「振り返り」を書く個人の様子を批判。



年度当初の児童の「振り返り」

➢ ぼくは雲には略記号があるのを始めてしりました。Cが10000mをこえるとかいうのは見たらわかったけど雲ってむずかしいと思いました。（A児、4月11日）
➢ 今日は、くもりで雲の種類はわからなかったけど、雲にはいろいろな種類があった。空によって、色、大きさ、温度、量がちがうことがわかった。自分が知らない名前がたくさんあった。（B児、4月11日）

【課題】
✓ 論としての展開が見られない。
✓ 事実的知識や主観的感想のみで、自分の考えや身の回りの生活等につながっておらず、表層的である。

4.「振り返り」の実践的検討：附属池田小の取り組み

「固有名詞で綴る振り返り」

- 「振り返り」のクラスメイトの氏名（「固有名詞」）と、その人の発言内容を書くように働きかける。
- 「振り返り」のなかにクラスメイトが登場することで、他者との応答関係が生じ、「振り返り」が応答性のある文章になる。

9月の「振り返り」

➢ 今回ぼくは始め、台風は、日しょう時間、海水温にかんけいしているとおもっていました。しかし、今回の授業の、〇〇さんの意見で、風の動きも関係しているのだということも分かりました。あと、台風の好きな場所も関係しているのかと思いました。台風の好きな所はあたたかいところだと思う。りゆうは、台風の発生する所は、ほとんどが南の海であたたかいからです。（A児、9/26）
➢ 台風の上陸接近には海水温、風、高気圧がかんけいしていて、雲をきゅうしゅうしながら進んでいることをしった。自分は、〇〇くんのいけんとよくにていた。次は、どうやって上陸や接近をはんだんしているのかをしりたい。（どの場所にいったらせっきんなのか。など）（B児、9/26）

- A児：他者の意見から推論を展開し、文章として表現できるようになった。具体的には、自分の予想とは異なる他者の意見に学んだ点や、そこからさらに発展して別の要素を仮説的に考えている点、さらにそのように考えた理由を表現できている点が挙げられる。
- B児：他者の発言への言及にとどまり、やや応答性に欠ける点は見受けられるものの、他者の発言を受けとめたうえで自分が次に調べてみたいことを書けている点で前進が見られる。

5. 成果

● 関係的思考力・表現力の育成

- 自他の意見を比較する、因果関係を推論する、次に探究すべきことを同定する等の力を育む。

● 生活への知の埋め戻し

- 教科知を児童自身の生活の文脈へと埋め戻し、子どもたちのメタな思考や自己調整を促す。

● 対話的な学級文化の形成

- 単なる「おしゃべり」を超えた「対話」が生まれる学級文化を形成する。

6. 参考文献

- 安彦忠彦（1987）『自己評価：「自己教育論」を超えて』図書文化
- 安彦忠彦（2021）『自己評価のすすめ：「自立」に向けた「自信」を育てる』図書文化
- Pinar, W. F., & Grumet, M. R. (2015). Toward a Poor Curriculum (third edition), Educator's International Press.